

博士論文（要約）

描かれる舞姫、描かせる舞姫

—崔承喜（1911～1969）における朝鮮文化の表象—

李 賢 峻

(LEE HYUNJUN)

東京大学大学院総合文化研究科課程博士学位論文

博士論文の要約

論文題名：

描かれる舞姫、描かせる舞姫

—崔承喜（1911～1969）における朝鮮文化の表象—

Dance between Two Worlds:

Korean Culture Represented in Choi Seung-hee(1911-1969)

氏名：李 賢 峻 (LEE HYUNJUN)

【本編目次】

(本編：A4版 全295頁)

序章 p.1

- 1 崔承喜とは誰か
- 2 日韓における崔承喜研究の現状
- 3 問題提起と研究の内容

第一章 『SAI SHOKI PAMPHLET』が語る〈崔承喜〉 p.16

—モダン・ダンサー崔承喜の戦略的イメージ発信をめぐって—

はじめに—議論の背景と問題提起

第一節 『SAI SHOKI PAMPHLET』とは何か p.17

- 1—1 研究状況の概況、『SAI SHOKI PAMPHLET』の位置づけ
- 1—2 『SAI SHOKI PAMPHLET』の発端
- 1—3 舞踊宣伝誌『SAI SHOKI PAMPHLET』の企画
- 1—4 編集から見直す崔承喜舞踊の宣伝戦略
- 1—5 半島の舞姫、モダン・ダンサーのイメージ形成をめぐって
—表紙デザインを中心に—

第二節 SAI SHOKI が踊る朝鮮舞踊をめぐって—所収記事を中心に p.29

- 2—1 「母のいぶき、日本的なるもの」—朝鮮舞踊の批評をめぐって
- 2—2 「和製・国産」としての「崔承喜」神話—石井漠の崔承喜論
- 2—3 依頼された感想文の意味
- 2—4 植民地言説の語りとしての崔承喜後援会の位置づけ

第三節 舞踊写真がイメージする崔承喜の戦略—舞踊写真を中心に p.45

- 3—1 『SAI SHOKI PAMPHLET』に表れた最初の舞踊発表会評をめぐって
- 3—2 人気演目『エヘヤ・ノアラ』をめぐる論争
- 3—3 崔承喜が表現する「朝鮮心」とは

第四節 昭和モダンを写す—広告を中心に p.59

- 4—1 広告の中の〈崔承喜〉
- 4—2 崔承喜が魅せる戦前の消費文化

まとめ—崔承喜の 1930 年代の自己語り

第二章 映画『半島の舞姫』をめぐる崔承喜のイメージ表象 p.71

—作られたテキスト「サイショウキ物語」—

はじめに—議論の背景、問題提起

第一節 崔承喜をめぐる新たなテキスト生成について p.73

1—1 「サイショウキ物語」の書誌情報

1—2 映画の成立過程

1—3 映画『半島の舞姫』の制作過程

1—4 スクリーンに表れた半島の舞姫

第二節 イメージの交差—映画、原作小説を中心に p.87

2—1 小説の中の「半島の舞姫」

2—2 テキストのずれ—ヒロイン「崔承喜像」をめぐる

2—3 日本の『私の自叙伝』、朝鮮の『나의自叙伝』の狙いと戦略

2—4 朝鮮版『나의自叙伝』をめぐる崔承喜舞踊論

第三節 大衆文化の中の「SAI SHOKI」—消費される植民地文化 p.102

3—1 育毛剤から百貨店まで、断髪のモガ崔承喜を消費する

3—2 広告から見る「崔承喜像」

3—3 「崔承喜像」が目指したもの、目指したこと

まとめ

第三章 発信する朝鮮の舞姫の舞踊写真、越境する日本帝国文化 p.113

—「崔承喜舞踊写真」論

はじめに

第一節 崔承喜舞踊写真の概観 p.113

1—1 1930 年代の写真界における「崔承喜舞踊写真」の位置づけ

1—2 舞踊写真の行方を訪ねて—日韓における舞踊写真の現状

1—3 本章の狙い

1—4 崔承喜の舞踊写真目録の作成に当たって

第二節 1930 年代の日本の写真界と舞踊撮影会をめぐる p.119

- 2—1 1930年代の日本の写真界
- 2—2 モダニズム写真家が写した朝鮮の舞姫
- 第三節 昭和モダニズムを写す **p.128**
 - 3—1 モダン・ガールのイメージ—初期舞踊写真を中心に
 - 3—2 安河内治一郎の「空を飛ぶ」、モチーフ写真
 - 3—3 堀野正雄、中山岩太らのモダニズム写真表現と舞踊
- 第四節 帝国を宣伝する植民地文化—戦前の雑誌掲載を中心に **p.151**
 - 4—1 『NIPPON』帝国を宣伝する植民地文化—崔承喜舞踊写真の掲載を例として
 - 4—2 対外文化宣伝誌の誕生—1930年代における日本の文化外交について
 - 4—3 「SAI SHOKI」、帝国日本の文化外交官としての役割
—満州事変からアジア・太平洋戦争まで—
 - 4—4 日本の文化政策と植民地舞踊家・崔承喜の位置づけ
—崔承喜の「アメリカ通信」を手がかりに—
- 第五節 オリエントのイメージ作り—欧米で撮影された舞踊写真を手がかりに **p.170**
 - 5—1 日米関係からみた1938年のジャパニーズ・ビューティ・サイ・ショウキ
 - 5—2 東洋の舞姫を打ち出す—アメリカで刊行された宣伝パンフレットを中心に
 - 5—3 在米写真家・須波荘一が描いた東洋の舞姫
 - 5—4 崔承喜が思い描いた東洋とは

第四章 アジア・太平洋戦争期の日本画壇と崔承喜舞踊画 **p.197**

はじめに—議論の背景及び狙い

第一節 1940年代の日本画壇と朝鮮の舞姫—議論の前提 **p.198**

- 1—1 帝国劇場の崔承喜舞踊発表会—舞踊画の手がかりとして
- 1—2 崔承喜の舞踊画が語るもの—作品の創作過程を通じて

第二節 崔承喜の自己表象—〈東洋〉モチーフをめぐって **p.205**

- 2—1 最初の依頼作品・有島生馬の《崔承喜の織姫》、安井曾太郎の《玉笛》
- 2—2 崔承喜が踊る東洋物語
 - (1) 東郷青児の《百済官女の舞》
 - (2) 小林古径の《舞踏図》—残されている下図
 - (3) 藤井浩祐の二つの《菩薩舞》のブロンズ像

2—3 企画、実演、そして展示としての東洋舞踊—戦争と舞踊

第三節 チマチョゴリへのまなざし—〈朝鮮〉モチーフをめぐって **p.224**

3—1 鏑木清方、石井鶴三が描く演目《散調》

3—2 小磯良平が描いた朝鮮モチーフ

3—3 石井柏亭の《崔承喜長鼓》

3—4 梅原龍三郎の二つの巫女踊り像

3—5 チマチョゴリへのまなざし—〈朝鮮〉モチーフの作品をめぐって

まとめ

第五章 戦前から戦後における日韓の文壇と崔承喜 **p.241**

—モチーフとしての〈崔承喜〉—

第一節 日韓の文壇と崔承喜の朝鮮舞踊 **p.241**

1—1 創作舞踊における日韓のプロレタリア文学の影響

1—2 日韓の文壇におけるモチーフとしての〈崔承喜〉

—三島由紀夫、斎藤茂吉、趙芝薫を中心に—

第二節 川端康成の『舞姫』 **p.250**

2—1 川端文学における〈舞姫〉—議論の背景、問題提起

2—2 川端康成、崔承喜に会う—1934年における川端の〈崔承喜論〉

2—3 並置される二つの戦争—第二次世界大戦、朝鮮戦争

2—4 舞姫たちの戦争—〈精神性〉についての考察

2—5 語られる「崔承喜」—1950年の川端康成の〈崔承喜論〉

2—6 結びに代えて—川端康成の1950年の崔承喜論

終章 **p.265**

参考文献 **p.272**

【別冊目次】

(別冊: A4版 全37頁)

「表1」 『SAI SHOKI PAMPHLET』 記事目録 p.1.

「表2」 『SAI SHOKI PAMPHLET』 写真・広告目録 p.2

「表3」 『SAI SHOKI PAMPHLET』 掲載広告イメージ一覧表 p.3

「表4」 崔承喜の舞踊写真・写真家一覧表 p.5

「表5」 崔承喜の舞踊写真・再収録掲載一覧表 p.13

「表6」 崔承喜舞踊画目録 p.17

崔承喜年譜 p.19

本論の目的は、1926年から1945年にかけての日本の文化や歴史、さらに芸術の流れを捉えるとともに、激しく揺れ動く時代の中で、戦前の日本文化の中の崔承喜の活動の在りかたを読み直し、その上で、崔承喜表象という問題に深く立ち入ってゆく。歴史の渦中において、朝鮮出身の芸術家として崔承喜がどのように自分の創作舞踊の主体性を日本で確保していたか、その過程を当時の資料を通して検証し考察する。また、このような検証を通して、昭和モダニズムの中での崔承喜表象の一端を探り、同時に、崔承喜自らのイメージ戦略による自己表象の在り方を探る。それは即ち、表象する作者側、表象される崔承喜側の関係を明らかにし、その中で生じたそれぞれの矛盾や葛藤、また妥協の過程を追究するということでもある。以上のように本論では、戦前における崔承喜の境遇を多角的に捉えることで、日本の帝国時代、並びに朝鮮の植民地時代の芸術家の在り方を考察するものである。

このような問題意識に基づき、本文では以下の二つの観点に注意しながら、論述を進めている。一つ目は、異郷で自分の芸術を開花させた崔承喜と、彼女を支えた日本人との交流の様相を探ること。二つ目は、1930年代の日本における植民地文化の位置づけを見直すということである。

研究方法は、崔承喜資料研究を中心に据え、視覚表現や言語表現を横断したテキスト分析を行うクロス・ジャンル研究の手法を取り入れる。さらにジャンル論として、舞踊と文学・絵画・写真・大衆文化など、様々なジャンルの交差や転換を通して生まれた新しい作品への転化の諸相を明らかにしてゆく。そして、このような研究手法によって日韓の芸術・文化を見つめようとする本論は、日韓比較文化論、比較芸術論という大枠の中に組み入れられよう。

この論文は序章・終章を合わせ全7章から構成される。本論の部分では雑誌、映画、写真、美術、小説を順に論じた。その論ずる順序は時系列に従っているが、しかし、雑誌や映画の場合は、重なり合う時期に発行や上演が行われており、写真の場合は戦前期の全体にわたって撮影されているため、実際のところ厳密な時系列の分け方は難しい。そのため、この論文では、時間の推移とともに、崔承喜のイメージがそれぞれのテキストの移動によってどのように変化していくのかを明らかにするとともに、さらにジャンルごとに展開されているイメージ表象のありようを併せて考察しようとした。

第一章は、『SAI SHOKI PAMPHLET』が語る〈崔承喜〉—モダン・ダンサー崔承喜の戦略的イメージ発信をめぐる—と題し、『SAI SHOKI PAMPHLET』と名付けられたグラフ雑誌を分析した。この雑誌は全3集から成り、1935年1月から1936年11月にかけて不定期に発刊された。月刊誌『音楽』を出版していた銀鈴会が「芸術家パンフレット」シリーズ

の一編として、「新進」の舞踊家・崔承喜を抜擢したものである。この雑誌社が崔承喜のパンフレットを制作した経緯は、1934年9月の日本青年館における発表会の成功によるところが大きく、石井漠が自身の舞踊団の一員として、崔承喜の舞踊を売り込み、それに雑誌社側の商業的な意図が合致して編まれた可能性が非常に高い。しかし、第1輯が刊行されて間もない1935年5月、崔承喜は石井漠舞踊団から退団し、九段に「崔承喜舞踊研究所」を構えてここに独り立ちした。それは、崔承喜自らが主体となって、自分の舞踊研究所を切り盛りし、公演活動及び舞踊創作を続けてゆこうとしたことを意味する。そして、『SAI SHOKI PAMPHLET』第2輯・第3号が刊行された1936年には、映画や自叙伝も世に出ることとなった。こうした商業とも深くかかわる文脈の中で当雑誌を眺めたとき、1935年以降の商品広告に見られる崔承喜像がいかなるものであったかを、この雑誌の掲載記事及び掲載写真を中心に論じている。

第二章は、「映画『半島の舞姫』をめぐる崔承喜のイメージ表象—作られたテキスト「サイショウキ物語」—」と題し、崔承喜の日本での知名度が高まりを見せる1935年以降を取り上げる。1935年から1936年は映画『半島の舞姫』の出演をめぐり、様々なジャンルの中で〈崔承喜像〉が提示されていく時期である。まず、崔承喜を題材にして書かれた小説『怒濤の譜』を分析し、その後、それを基に作った映画『半島の舞姫』を分析した。1936年4月1日に封切られたこの映画は、以降4年間もの間、日本や朝鮮の各地を巡りながら興行した。これによって崔承喜は、朝鮮の舞踊家、即ち「半島の舞姫」としてのイメージを確立してゆくのである。石井漠流のモダン・ダンスではなく、朝鮮舞踊が人気を得た背景には、映画『半島の舞姫』の興行があった。それによって、朝鮮からきた崔承喜のイメージである「半島の舞姫」は、日本の舞姫として肯定され、支持されることになった。そこで第二章では、崔承喜のこうしたイメージの形成に自叙伝や小説、さらにそれを基にして作った映画の果たした役割について論じた。

第三章は、「発信する朝鮮の舞姫の舞踊写真、越境する日本帝国文化—「崔承喜舞踊写真」論—」と題し、1930年代に多く撮影された「崔承喜舞踊写真」に注目している。戦前のモダニズムを標榜した日本の写真家たちによる作品や、対外宣伝誌『NIPPON』、そしてニューヨークにスタジオを構えていた Sunami Soichi が撮影した写真を新たに見直し、分析した。1930年代には、堀野正雄、桑原甲子雄、中山岩太など、モダニズム写真の旗手たちによって、崔承喜の「舞踊写真」が次々と撮影された。また、崔承喜の舞踊写真はこのようなプロの写真家のみならず、写真関連会社や舞踊団が開催した有料・無料撮影会の場で、アマチュ

ア写真家たちによっても数多く撮影された。このときに撮影された写真は、当時のグラフ雑誌や婦人雑誌などに投稿され、掲載されるものも少なくなかった。これらの写真は、名取洋之助が組織した写真家団体「日本工房」の発行する対外宣伝誌『NIPPON』（1934年～1944年）において、日本の文化宣伝の一環として再収録されていた。こうした『NIPPON』掲載の舞踊写真は、崔承喜の世界公演を後押しする役割を果たす一方で、帝国日本の宣伝としての機能も併せ持っていた。これに対する崔承喜の受け止め方も含め、『NIPPON』への掲載を巡る諸問題について考察する。さらに崔承喜の舞踊写真が、時代の文脈や、掲載媒体の移動によって様々な文脈で発信されてゆくありようについても論じている。

第四章は、「アジア・太平洋戦争期の日本画壇と崔承喜舞踊画」と題して、1940年代に描かれた「崔承喜舞踊画」に注目し、崔承喜と戦前の画壇との関わりを明らかにしている。崔承喜が自ら表象し、また、他者によって表象されていった戦前の崔承喜の姿に注目し、1940年代における民族主義と帝国主義とのせめぎあいの中で展開された崔承喜の芸術活動について再考した。その手掛かりとして、これまでほとんど研究されることのなかった崔承喜を描いた舞踊画に注目した。1944年1月25日から2月3日にかけて、帝劇画廊で催された「崔承喜舞踊画鑑賞会」に出品が確認された画家としては、有島生馬、安井曾太郎、東郷青児、小磯良平、梅原龍三郎、石井柏亭、藤井浩祐の七人が既に知られている。それに加え、舞踊画を描いた画家として新たに鏑木清方、小林古径、石井鶴三の三人の作品や図版を見つけることができた。現在までの調査で判明している崔承喜の舞踊画を描いた画家は全部で十人であり、作品数は下絵を含め二十九点に上った。このような戦前の錚々たる画壇の重鎮たちが、なぜ、挙って崔承喜を描いたのだろうか。その意味を追究し、この時期に描かれた崔承喜イメージを論じる。

第五章では、「戦前から戦後における日韓の文壇と崔承喜—モチーフとしての〈崔承喜〉—」と題し、日本の文壇と崔承喜の関わりについて論じる。まずは崔承喜をめぐる日本と朝鮮の文壇の交渉を取り上げる。そこで石川啄木をはじめとする日本の社会主義文学が戦前の朝鮮文壇に与えた影響を概観しつつ、崔の創作舞踊の下地を形作った思想背景を探る。さらに戦前日本や朝鮮の文学空間に表れたモチーフとしての〈崔承喜〉に注目し、ことに三島由紀夫や斎藤茂吉、そして朝鮮の詩人・趙芝薫の作品を取り上げる。最後に戦後発表された川端康成の『舞姫』に注目する。ここでは川端康成と崔承喜の交流に着目し、今まで小説『舞姫』の中であまり関心を持たれてこなかった川端康成における「崔承喜像」を探る。これを通して戦前・戦後における「朝鮮像」を浮き彫りにし、特にこの小説の時代背景になってい

る二つの戦争、即ちアジア・太平洋戦争及び朝鮮戦争を読み直し、その中で崔承喜や朝鮮がどのように持ち出され、描かれているのかを明らかにする。

以上のように本論は、こうした崔承喜という人物を取り上げるにあたり、特定の学問領域において限定的に論じる従来の研究方法から離れ、多様なジャンルの中で描かれた〈崔承喜〉のイメージを追究したものである。本論を貫く崔承喜表象論の理論的な枠組みは、比較文学研究の手法に基づくジャンル論の視座に立った知見を得て、はじめて可能となった。即ち、本論における崔承喜の表象研究は、文学テキストに限らず、絵画や写真、映画、雑誌など、多彩な領域を転移して生じる解釈可能性を示したクロス・ジャンルの方法を拡張することによって成立していることを強調しておきたい。